CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

新見公立短期大学紀要　第23巻
pp. 53－60, 2002

原　著

# 老年看護学の授業による学生の高齢者イメージの変化
## 第１報　老年看護学Ｉの授業評価

古城　幸子　　木下　香織

看護教育学

Changes of Students' Images of the Elderly Caused by Gerontological Nursing Lectures
Chapter One The Evaluation of Gerontological Nursing Ⅰ Lectures

Sachiko KOJO　　Kaori KINOSHITA

（2002年11月１日受理）

老年看護学の教育効果を縦断的に評価し、今後の授業デザインの検討を行うことを目的として、高齢者イメージの視点から調査を行った。今回は１年次の老年看護学Ｉの授業内容および演習について高齢者イメージの変化を見た。その結果、学生の62％が祖父母との同居経験があり、また、54.7％が「会話がある」と答えており、老親介護意志は85.7％の学生が持っていた。

学生の高齢者イメージは4.33で肯定的であり、同居の有無による影響は「大胆－繊細」の１項目のみで、その他の学生の背景はイメージに影響を与えていなかった。老年看護学Ｉの学習前後には、前で4.33、後で4.37と有意差は認められなかったものの肯定的に変化していた。23項目のうち、学習前後で有意差が見られた項目は８項目であった。授業内容の影響は、どの内容も80％を越えて良い影響を受けていた。これらの結果を踏まえ、２年次の演習において負の体験にならないような学習の意味付けが重要であり、今後の教育方法への示唆を得た。

## はじめに

1990年より、老年看護学が基礎看護教育カリキュラムの一つの柱として指定規則に位置付けされて以来、筆者等は教育内容や教授方法に試行錯誤を重ねてきた。10年を経て、到達目標の設定および教育内容について第１段階のまとまりに至った様に思う。それらの過程の中で、最も苦慮した実習施設および形態も、施設ごとの学びを意味付け（古城他；1993）、実習のねらいを「８つのＰ」（古城他；1999）として示す事が出来た。また、講義内容についても、様々な試み（古城；1995）で高齢者理解の深まりを確認し、さらに、独自の演習方法としてバリアフリー体験（古城他；1994）や出身地のフィールドワーク演習（古城他；2000）などの教育効果を明らかにしてきた。

10年間の蓄積を再評価し、新にクローズアップされている倫理的課題や老年看護技術に関する新しい教育内容や方法を再検討するために、2001年度入学の学生に対して高齢者イメージの深まりの視点から、老年看護学Ｉ、老年看護学Ⅱ、老年看護学実習の教育効果を、縦断的に評価する予定である。今回は、老年看護学Ｉの内容について調査

を行い、今後の授業設計の示唆を得たので報告する。

## I　研究の背景

看護学生の高齢者イメージについては、老年看護学が改定カリキュラムによって柱立てされた1990年ごろから、多くの先行研究がなされている。小泉他（1990）、吉田他（1992）、吉尾他（1993）、大谷他（1995）、後藤他（1997）などによると看護学生の高齢者イメージはやや否定的傾向を示し、大塚ら（1999）、鈴木他（2000）などでは肯定的傾向を認めている。多くは身体的側面において否定的であり、精神的側面で肯定的に捉えることが共通している。

大谷他（1995）は、高齢者イメージは看護に取り組む姿勢を形成する源であり、看護の質・内容に影響を及ぼすと述べている。学生の高齢者イメージとそれに影響を与えた背景や体験について理解する事は、基礎看護教育の中で望ましい高齢者像を身につけさせるための教育方法を検討する際に重要な情報となることは言うまでも無い。

また、高齢者イメージと教授方法との関連についても、この数年間その方法論について試行錯誤の報告が見られる。老年看護学Ｉで筆者等もとり入れているライフヒストリー・インタビューについて、その効果がいくつか報告されている。

小泉ら（1998・2000）は、ライフヒストリー・インタビューを授業にとり入れて、その効果をイメージ調査で評価しているが、高齢者個人への理解がイメージを肯定的に変化させる事を示している。また、個人の人生の重みや価値を受けとめ、尊敬の念が自然に生まれる効果を述べている。高森（2001）や寺門ら（2001）も同様に、高齢者の個人史インタビューは、高齢者への共感的理解を深めると報告している。

その他、高齢者イメージとの関連で、金政ら（2000）の高齢者の疑似体験学習、薬師寺ら（1999）の特別養護老人ホームの見学実習、石井ら（1999）の疑似体験・看護過程展開・痴呆症のビデオ学習など、一つの演習や課題についての学習効果の調査研究がなされている。しかし、老年看護学の講義全体、および授業内容の一つ一つについての学習効果を評価した報告は見られなかった。

本学においては橋本（1991）によって、高齢者イメージの調査が行なわれており、今回は、2001年度の老年看護学Ｉの授業評価と共に、10年前に行なわれた橋本（1991）の調査結果との比較を試み、時代的な背景と本学学生の変化を明らかにすることを３年計画の調査の最終的な目的とした。

## II　研究目的

老年看護学Ｉ（30時間）は、１年次後期に主として高齢者理解を深めることを目的として展開している。授業内容は「対象論」「家族論」「健康論」の講義終了後に、演習として「祖父母のライフヒストリー」の聞き取り[注1]、米映画「コクーン」の鑑賞[注2]とそれぞれのレポート作成及びグループ討議を行っている。

授業内容の評価として、高齢者イメージに焦点を当てた。調査対象は2001年度入学生で、老年看護学Ｉ学習前後に、学生の高齢者理解がどの様に変化し深まったのか明らかにする。

## III　研究方法

1、調査対象：本学看護学科１年次生64名
2、調査時期：2001年度老年看護学Ｉの授業開始時（2001年10月）および終了時（2002年２月）
3、調査方法：構成的アンケート用紙を使用し、23の形容詞対によるイメージ調査を行った。
4、分析方法：統計パッケージ SPSS Ver.11を使用し、Ｔ検定を行った。
5、倫理的配慮：調査は任意であり、調査内容は統計的に処理すること、個人の成績などへの影響はないことを書面および口頭で説明した。

## IV　結　　果

### 1、学生の背景

配布した64名のうち60名の回答があり、回収率は94％であった。学生の背景は、図１のように62％

が祖父母との同居経験があった。また、図2のように祖父母と「良く話す」「たまに話す」学生は、平均54.7%で半数の学生は祖父母との会話があると答えている。内訳を見ると、母方の祖母で最も多く76.3%であり、母方の祖父が最も低く47.4%であった。同居体験の有無による祖父母との会話頻度への影響としての優位差は見られていない。

老親介護については、図3のように「当然すべき」と答えた学生が32.2%「できればしたい」が52.5%「どちらともいえない」が11.9%「困難である」が3.4%という考え方を持っていた。同居の有無による老親介護意志への影響についても有意差は見られなかった。

## 2、学習前の学生のイメージ

次に、高齢者イメージは、図4のグラフで示した。7段階の尺度で中間値は4、学習前の平均は

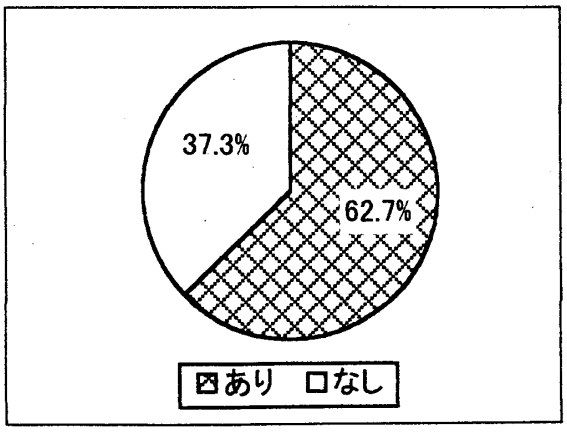


図1．同居経験

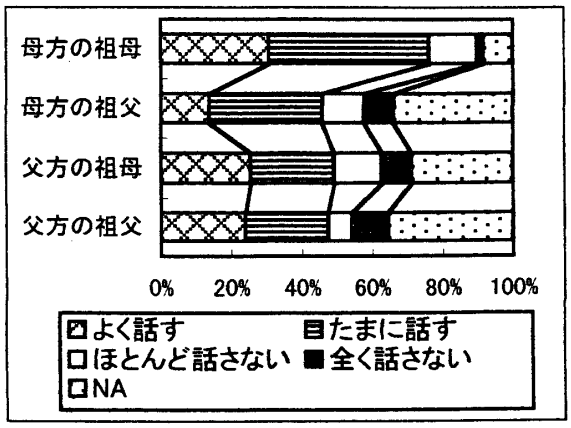


図2．祖父母との会話

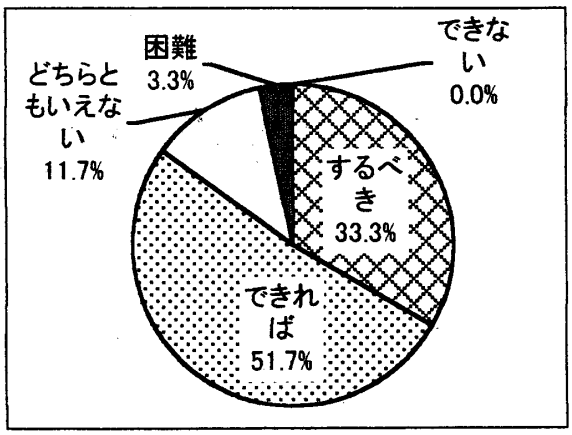


図3．老親介護意志

4.33であった。23の形容詞対のうち、学習前では「動的－静的」「大胆な－繊細な」「鋭い－鈍い」「強い－弱い」「鮮やかな－淡い」「賑やかな－静かな」の6項目が中間地4を下回り、やや否定的であった。残り17項目で中間地4を上回り、肯定的な回答であった。同居の有無による影響は「繊細－大胆」の1項目のみに有意差が見られ、同居経験ありの学生がより「大胆」にイメージしていることがわかった。その他の項目では同居経験の影響は認められなかった。

## 3、老年看護学Ⅰ学習前後の比較

高齢者イメージの学習前後の平均をみると、学習前が4.33、学習後が4.37で、やや肯定的に傾いたものの、有意差が見られるほどではなかった。老年看護学の学習前後に有意差の見られた項目は、図5のように「柔らかい－固い」が「柔らかい」方へ（$P<0.1$）、「鋭い－鈍い」が「鋭い」方へ、「あたたかい－冷たい」が「冷たい」方へ、「安定した－不安定な」が「不安定な」方へ（$P<0.05$）、「大胆な－繊細な」が「繊細な」方へ、「楽しい－苦しい」が「苦しい」方へ、「複雑な－単純な」が「複雑な」方へ、「美しい－みにくい」が「美しい」方へ（$P<0.01$）変化していた。変化の見られた8項目のうち7項目は中間値4以上の肯定的イメージの中での変化であったが、中間値4以下の否定的なイメージへより変化したのは「大胆な－繊細な」であった。

その他、やや学習の影響が見られたと考えられたのは、「やさしい－厳しい」（$P=0.16$）「価値

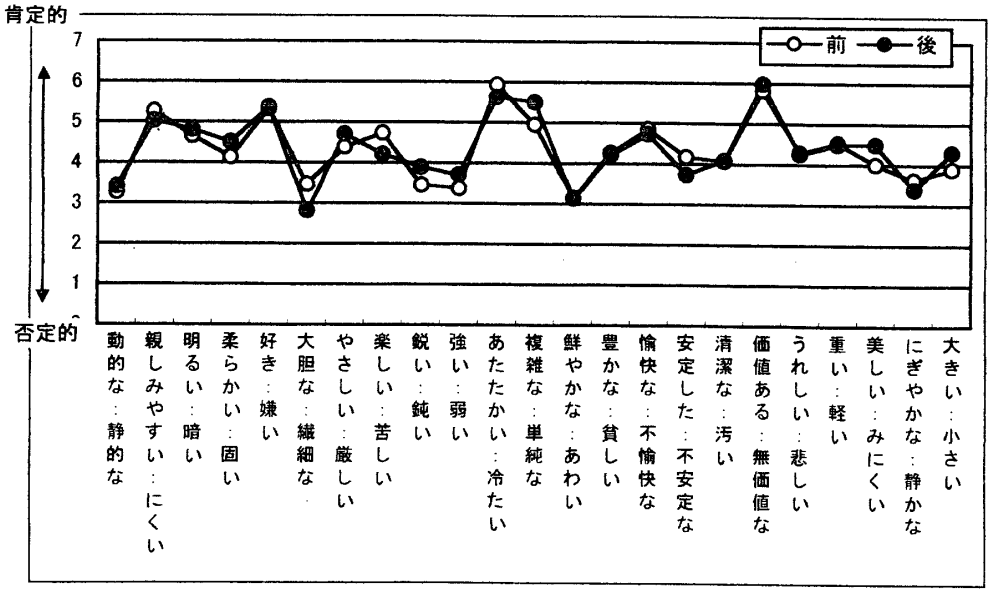


図４．高齢者イメージの変化

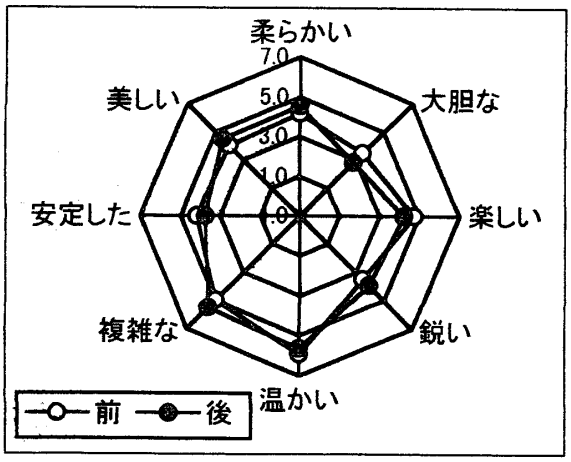


図５．高齢者イメージの変化(有意差のあった項目)

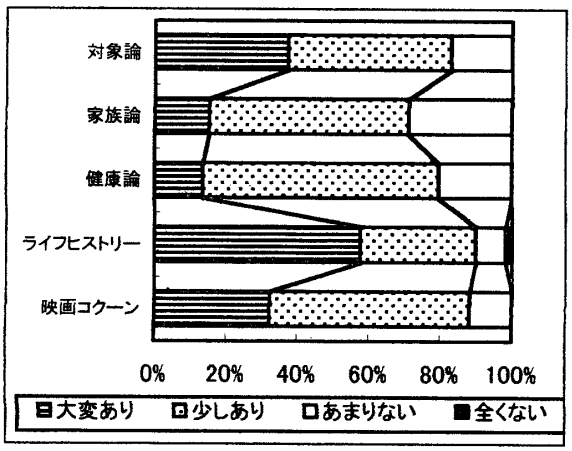


図６．高齢者イメージへの影響

ある－無価値な」（P＝0.15）「大きい－小さい」（P＝0.13）で肯定的に、「にぎやかな－静かな」（P＝0.17）では「静かな」ほうへ変化する傾向が見られた。

### ４、授業内容による分析

授業内容で「高齢者イメージへの影響」を検討した結果、図６のように「大変影響を受けた」と答えたのは、祖父母のライフヒストリーの演習で59%、「少し影響を受けた」も合わせると90%が影響を受けたと回答している。次に映画コクーンで88%、対象論が83%であった。どの内容も高齢者イメージへの影響があったと答える学生が多く、グループワークをとり入れた２つの課題、ライフヒストリーと映画については、その印象は強かったと思われる。特に学生自身の祖父母へのインタビューは、高齢者イメージに強く影響したことがわかった。

それぞれの講義項目で影響を受けたと回答した学生のイメージの変化を見ると、全体で前後差のあった形容詞対８項目以外に、図７のように新たに３項目の有意差が見られた。対象論では「強い」「大きい」というイメージが、家族論では「強い」「価値ある」、ライフヒストリーでは「強い」、映画「コクーン」では「大きい」というイメージがそれぞれ強化されていることが分かった。

| | 強い | 価値ある | 大きい |
|---|---|---|---|
| 対象論 | ↑** | | ↑* |
| 家族論 | ↑* | ↑** | |
| 健康論 | | | |
| ライフヒストリー | ↑* | | |
| 映画「コクーン」 | | | ↑* |

*;P<0.1　**;P<0.05

図7．講義内容の影響（8項目以外）

## V 考　察

〈学生の背景と高齢者イメージ〉

1991年の本学学生への調査では、同居経験は57%であり、やや今回の学生の同居経験が多い結果であった。全国の65歳以上高齢者のいる三世代同居率は26.5%（国民衛生の動向；2001）であり、本学学生の同居率は高く、看護職への動機付けがそのような生育環境に由来している事も推測される。

介護意志については、1991年調査では設問の仕方が異なるものの、否定的な反応が過半数を占めており、3年次の実習後に否定的反応が減少するという結果であった。今回は「どちらとも言えない」「困難である」を否定的反応とすると約15%であり、否定的反応は少ない学生であった。

会話頻度は54.7%が「話す」と答えており、これら学生の背景と高齢者イメージを見ると、同居の有無によって「大胆－繊細」の項目のみに有意差が見られたものの、学生の背景は高齢者イメージにほとんど影響がないことがわかった。

大塚ら（1999）も、学生の背景としての同居の有無や、実習・世話体験の有無には関連がなく、会話頻度にイメージが影響を受けると報告している。また、吉田他（1992）大谷他（1995）は、高齢者と話す機会の多いほど肯定的で、さらに親の高齢者に対する接触、姿勢が影響していると報告している。今回は、会話頻度においても全く関連がなく、親の高齢者への姿勢については調査項目に入れていなかったため、今後の検討課題となった。

老年看護学学習前の高齢者イメージについてみると、平均で4.33と中間値4を越えている。1991年調査では3.7であったが、今回の学生は肯定的反応であった。中間値4を下まわる否定的項目の数を見ると、23項目中今回は7項目に対して、1991年調査では13項目と多く、否定的傾向であった事が伺われる。

看護学生の高齢者イメージについて、小泉他（1990）は、やや否定的イメージを持つが、「尊厳性」「親近性」は肯定的であったと報告しており、吉田他（1992）大谷他（1995）は、身体的に否定的、精神的に肯定的、吉尾他（1993）はやや否定的と述べている。また、薬師寺ら（1999）も同様の調査で、学生は高齢者に対して円熟性のあるイメージを持ちつつ、非活動性のイメージを持ち全体的には否定的なイメージを持つ学生が多いと報告している。

一方、大塚他（1999）や鈴木他（2000）は、やや肯定的イメージを持っていると報告している。1990年前半の調査ではやや否定的イメージの報告が多く、2000年前後の調査では肯定的イメージの結果報告が見られる。1991年本学調査と今回の比較においても同様の変化が見られ、これは社会の高齢者に対する見方や考え方の変化によるのではないかと推察する。小学校などで盛んに企画されている三世代の交流で、高齢者の知恵に触れる体験や、ボランティアで高齢者世帯の訪問、高齢者施設への実習など広範囲に高齢者に触れる機会が確実に増えてきている。また、公共交通期間においても弱者として扱われていた高齢者専用のシルバーシートが、Priority　seat に変わった。高齢者と同じ線上で障害者や妊産婦、赤ちゃん連れのお母さんなども、社会の中で守られる存在として認知されるようになり、高齢者だけが特別に労わり気遣う存在ではないと考えられるようになった事の現れであろう。

〈授業内容と高齢者イメージ〉

老年看護学Ⅰの学習前後では、全体のイメージで明確な変化は見られなかったものの、項目別に見ると変化した8つの項目において、肯定的に変化したのは「柔らかい」「鋭い」「複雑な」「美しい」の方向で、「大胆な」「楽しい」「温かい」「安

定した」は否定的方向へ変化した。肯定的に変化したものは、価値観を伴うイメージであり、身体的運動的側面が否定的方向に変化したと考えられる。

授業内容を細かく見ると、対象論では老化の過程を身体的・精神的・社会的に捉え、ライフサイクル及び現在の日常生活について、どちらかというとマイナス要因を含んだ授業内容にもかかわらず、「強い」「大きい」といった項目が肯定的に強化されているのは、予想外であった。多くの事例や場面を通して老化の個別性を強調したことが影響したと推測される。

家族論では、現代の家族関係や、高齢者と家族、家族介護機能についての内容で進めているが、ここでも「強い」「価値ある」といったイメージが強化されており、家族の中での高齢者の存在が価値あるものとして意識づけされていたことがわかった。

映画鑑賞では、「大きい」というイメージが強化されており、4組の高齢者夫婦が人生の岐路に立った時の選択が、人格の統合といった個々の人生や重要他者との関係性の中で発揮されることを理解できたのではないかと考えられる。

ライフヒストリーは「強い」高齢者のイメージが強化されている。これは激動の大正・昭和を生き抜いた祖父母の人生をたどり、学生自身の命の存在に繋がっている実感を得たからに相違ない。小泉他（1998・2000）もライフヒストリー・インタビューに応じた高齢者のイメージが学生の高齢者イメージに肯定的に働くことを報告している。

**〈今後の課題〉**

今回学習後に否定的イメージに傾いた4項目のうち、1991年の調査では、「安定した」、「温かい」、「楽しい」の3項目は3年次実習後に肯定的へと変化するという結果が得られているので、今後の演習・実習の中で、高齢者の暖かさや楽しさ、そして、ケアを通して安定性を支えるような指導が必要になってくると考える。

石井他（1999）は、疑似体験学習や看護過程演習、痴呆症高齢者等のVTRを学習した前後で、高齢者イメージは、動きが鈍く、面倒になるという身体的精神的な老化のマイナスイメージが強くなったと述べている。金政他（2000）も同様に、老人疑似体験学習前後で、老人イメージは身体的特徴が現実的になり、身体的のみならず心理社会的側面のイメージも低下したと報告している。演習が負の体験とならぬように、体験学習の意味付けをする必要がある。

また、吉尾他（1993）学習を重ねるごとに否定的イメージに変化すると報告し、鈴木他（2000）学年進度では変化がないが、老年看護学実習、2年次講義および演習でネガティブに変化すると述べている。本学の2年次老年看護学Ⅱでは、より広く地域や行政施策に関する講義、バリアフリー体験や老年に特徴的な看護診断に伴う演習などを計画しており、これらの先行研究の結果を見ると、演習実習が否定的なイメージへと変化する可能性があり、指導方法などに充分な検討が必要になると思われる。

## Ⅵ　結　　論

2001年度看護学科1年次生に、老年看護学Ⅰ学習前後の高齢者イメージの調査を行った結果、以下のことがわかった。

1、学生の62％が祖父母との同居経験があり、また、会話頻度は54.7％が「会話がある」と答えている。老親介護意志は85.7％の学生が持っていた。

2、学生の高齢者イメージは4.33で肯定的であり、同居の有無による影響は「大胆－繊細」の1項目であった。その他の学生の背景はイメージに影響を与えていなかった。

3、老年看護学Ⅰの学習前後には、前で4.33、後で4.37と肯定的に変化していたものの、全体では有意差は認められなかった。

4、23項目のうち、学習前後で有意差が見られた項目は、「柔らかい↑」「鋭い↑」「複雑な↑」「美しい↑」「大胆な↓」「楽しい↓」「温かい↓」「安定した↓」の8項目であった。

5、授業内容の影響は、どの内容も80％を越えて影響を受けており、それぞれに、影響を受けた項目には差が見られた。

## おわりに

今回の調査の限界は、他の要因についての検討が不充分なことである。高齢者理解の深まりの変化は、老年看護学の講義だけでなく、基礎実習Ⅰでの看護体験、家族の病気体験、日々日常の高齢者とのふれあいなど、様々な要因が影響していると思われる。

今後は、今回の調査対象が実習の経験などから、どの様に影響を受けて成長して行くのか縦断的調査を継続し、基礎看護学教育の中での学生の高齢者イメージを多様性と個別性を持ったイメージで捉えられるような教育内容の検討を重ねて行きたい。

なお、本研究は、日本看護学教育学会第12回学術集会において発表し、加筆修正を加えたものである。

注1　「祖父母のライフヒストリー」の聞き取り

冬期休暇中の課題。学生の祖父母に対して祖父母自身のライフヒストリーをインタビューする。インタビュー内容を祖父母の人生をたどる形で物語としてレポートする。身近な存在の祖父母の人生をたどることで、高齢者への関心がより深まり、個別性や多様性を理解できることをねらいとしている。

注2　米映画「コクーン」の鑑賞

アメリカのSF映画、1985年Ron　HAWERD監督「COCOON」、1988年Daniel PETRIE監督「COCOON The return」を鑑賞し、登場する4組の老夫婦が様々な場面でどのような選択をしていくかを焦点にレポートする。生と死、病、性、愛、友情、生きがい、家族など多くの命題を突きつけられる。“高齢者のQOLとは”を考えることをねらいとしている。

## 引用文献


1）後藤真澄他（1997）：老人のイメージに関する研究、看護教育、38(2)、1997、PP129～133

2）橋本祥恵（1991）：看護学生の老人観について、新見女子短期大学紀要、12、1991、PP83－94

3）石井知子他（1999）：高齢者看護の教授方法を考える、聖マリア学院紀要、14、1999、PP67～70

4）金政直美他（2000）：老人疑似体験による老人イメージの変化、日本看護教育学会誌、10(2)、2000、P81。

5）小泉美佐子他（1990）：看護学生の老人イメージ、筑波医療技術短期大学紀要、11、1990、PP33～39

6）小泉美佐子他（1998）：ライフヒストリー・インタビューによる看護学生の高齢者イメージの変化、群馬保健学紀要、19、1998、PP31～36

7）小泉美佐子他（2000）：老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果、老年看護学、5(1)、2000. PP140～146

8）国民衛生の動向（2001）：48(9)、2001、厚生統計協会、P40

9）古城幸子他（1993）：老人看護施設実習における学びと指導上の課題、新見女子短期大学紀要、14、1993、PP111～124

10）古城幸子（1994）：老人臨床看護学の授業展開～バリアフリー体験学習から得たもの～、岡山県看護教育学会、1994、PP 1 ～ 8

11）古城幸子（1995）：老人理解への青年の視点、臨床看護研究、2(1)、1995、PP131～141

12）古城幸子他（1999）：高齢者理解を深める臨地実習のねらい、新見女子短期大学紀要、20、1999. PP

13）古城幸子他（2000）：老年看護学の授業展開～学生の出身地のフィールドワークを取り入れて～、日本看護学教育学会・第10回学術集会、2000

14）大谷英子他（1995）：老人イメージと形成要因に関する調査研究、日本看護研究雑誌、18(4)、1995. PP25～38

15）大塚邦子他（1999）：看護学生の老人のイメージに関する研究、老年看護学、4(1)、1999. PP98～104

16）鈴木みちえ他（2000）：学年進度からみた学生が抱く老年イメージの縦断的変化に関する調査、聖霊学園浜松衛生短期大学紀要、23、2000、PP76～85

17）高森美恵子（2001）：老年者の共感的理解を目指す授業デザインと評価、ナースエデュケーション、2(3)2001. PP51～59

18）薬師寺文子他（1999）：効果的な老人理解に関する看護教育方法の検討、広島県立保健福祉短期大学紀要、4(1)、PP35－45、1999

19）吉田正子他（1992）：看護学生の老人イメージに関する研究（Ⅰ）、神戸市立看護短期大学紀要、11、1992、PP55～62。

20) 吉尾千世子他（1993）：看護学生の老人に対するイメージの変化、順天堂医療技術短期大学紀要。4．1993、PP43～49